

[果樹部門]

6. 加温年末出荷作型で果肉がしっかりした「紫苑」を生産するための副梢管理方法

[要約]

加温年末出荷作型で果肉がしっかりしたブドウ「紫苑」を安定して生産するには、満開15日後から果粒軟化期まで再発生した副梢を、2～5日毎にこまめにかき取る管理が有効である。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話086-955-0276

[分類] 技術

[背景・ねらい]

ブドウ「紫苑」は岡山県で「次世代フルーツ」として生産振興を図っている。しかし、現地で生産される果実は園地や樹による硬度のバラツキがあり、年末まで硬く維持できないことが課題となっている。一方、「紫苑」は他の品種に比べて副梢の発生が旺盛なため、こまめな副梢管理が果実品質に影響を及ぼすと考えられる。そこで、加温年末出荷作型で果肉がしっかりした果実を生産するための副梢管理方法を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 満開15日後から果粒軟化期まで再発生した副梢を放任し、果粒軟化期に一斉に切り返す枝管理（放任区）では、11月下旬以降急激に果実が軟らかくなるが、2～5日毎に再発生した副梢をかき取る管理（芽かき区）では、12月下旬まで果実を硬く維持できる（図1）。
2. 芽かき区は放任区に比べて、果実の生理障害の発生がわずかに多かったものの、果実品質に大差はない（表1）。
3. 芽かき区は放任区に比べて、秋期の葉色が濃く、葉焼けを軽減できる（表2）。
4. 芽かき区は放任区に比べて、作業時間が多く必要である（図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 長大な副梢を一斉にかき取ると、生理障害の発生を助長するおそれがあるため、2～5日に1度程度こまめに行う。
2. 本試験には5～6年生樹（1区2樹）を供試した。

[具体的データ]

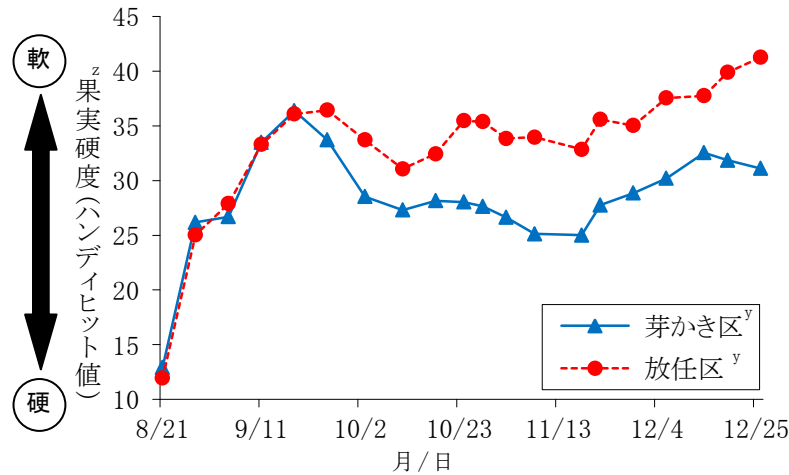


図1 「紫苑」の副梢管理方法の違いが加温年末出荷作型の果実硬度に及ぼす影響

^z 値が小さいほど果実が硬いことを示す

^y 芽かき区：2～5日毎に再発生した副梢をかき取る枝管理

放任区：満開15日後(6/20)から果粒軟化期(8/20)まで再発生した副梢を放任し、果粒軟化期に一斉に切り返す枝管理

表1 「紫苑」の副梢管理方法の違いが加温年末出荷作型の果実品質に及ぼす影響

区	果粒軟化日 (月/日)	果房重 (g)	果粒重 (g)	糖度 (° Brix)	酸含量 (g/100ml)	果皮色 ^z (c.c.値)	果実硬度 ^y (ハンディヒット値)	生理障害 発生果房率 ^x (%)
芽かき区	8/21	952	16.6	20.1	0.46	4.2	31.1	3.1
放任区	8/22	938	15.9	19.9	0.42	4.4	41.3	1.6

^z 農水省監修カラーチャート値

^y 値が小さいほど果実が硬いことを示す (12月26日調査)

^x 生理障害は縮果症、日射症、シミ

表2 「紫苑」の副梢管理方法の違いが葉色及び葉焼け新梢率に及ぼす影響

区	葉色 ^z (SPAD)	葉焼け新梢率 ^y (%)
芽かき区	45.2	8.0
放任区	41.6	12.8

^z 10月29日の10節葉色

^y 本葉が葉焼けしている新梢の割合

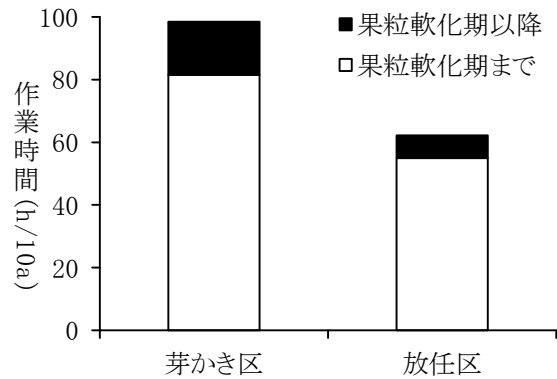


図2 「紫苑」の副梢管理方法の違いが作業時間に及ぼす影響

[その他]

研究課題名：「紫苑」の出荷期間拡大技術の確立

予算区分：県単（儲かる次世代フルーツ等果樹産地育成対策事業）

研究期間：2012～2014年

研究担当者：高橋知佐、安井淑彦、中島譲

関連情報等：1) [平成23年度試験研究主要成果、27-28](#)

2) [平成24年度試験研究主要成果、33-34](#)